



貴布祢神社 (通称 五穀神社)

鎮座地 下関市田中町一―五

御祭神 (主祭神) 倉稻魂命

保食神

高糶神

主要祭典 例祭 (九月一七日)

社殿 本殿 (流造・一坪)、

境内神社 福寿稻荷神社 (倉稻魂命)

境内地 一五一坪

境内建造物

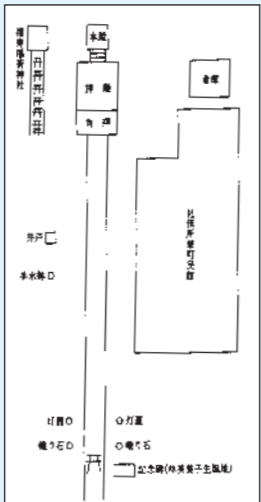
鳥居 (石造・文久元年)、
灯籠一对 (石造・文化元年)、
幟立一对 (石造)、
手水舎 (石造・文化一四年)、
井戸、林芙美子生誕地碑
(自然石・昭和四一年)、
社務所兼町民館 (六五坪)

由緒沿革

江戸時代の寛政一一年 (一七九九) の鎮座と伝え、五穀の守護神として一般には五穀神社と称す。鎮座地の田中町の地名も、この故事によるという。昭和二〇年 (一九四五)、戦火に罹り、社殿をはじめ総てのものを焼失した (旧無格社)。

神社庁設立以降

昭和二八年 (一九五三)、現社殿を再建。昭和五八年 (一九八三)、社務所兼町民館を建設。昭和六一年 (一九八六)、境内社の福寿稻荷神社を改築。平成六年 (一九九四)、社殿の屋根を銅板に葺替え、向拝 (外拝殿) を増築。宮司 竹中恒彦

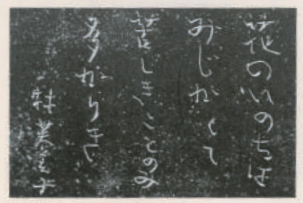


由緒板の建立 (内容)

大古 田中町の平地は唐戸湾の入り海で、川の上砂が堆積して川原になりやがて土地や田ができました。田の中を流れる田中川は、大雨が降るとしばしば氾濫するため、水の神様 (高糶神 稲の神様 (倉稻魂命) 五穀の神様 (保食神) が祀られました。神社の土地は (昔の地名) 字中島といひ、昔は川原の中島で、ここに寛政一一年 (一七九九年) 江戸時代中ごろに神社が建立されました。正式には貴布祢神社といひ、通称は五穀神社と称して田中町の守護、家内安全、商売繁盛の神様として崇敬されています。平成十一年九月十五日



林芙美子



亀山八幡宮境内の石碑

十六年十二月三十一日」と、上田強氏によって確認されるまでは、二十七年説が信じられていたから、昭和三十二年以前のメモであろう。しかし、彼女は『一人の生涯』という作品に「本当は五月に生まれたのだそうです。朝十時頃、ブリキ屋の二階で生まれたのだそうです」と書いており、ほかに六月説もあるというから、ことは面倒になる。ブリキ屋も、かつては下関市上田中町の五穀神社付近と西之端噴泉湯裏の二説があったが、昭和四十一年、神社境内に「生誕地碑」が建てられた。たびたび氾濫する田中川によって水浸しとなる神社脇の槇野敬吉というブリキ屋に信憑性がある。とされたからだ。

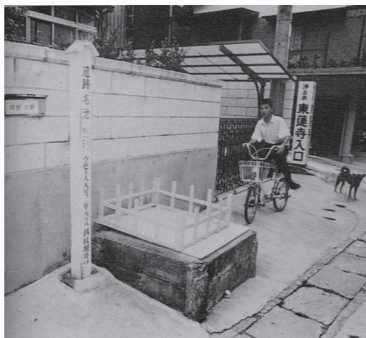
ところがその後、井上隆晴氏が『二人の生涯』の中で、門司区小森江のブリキ屋坂東忠嗣宅説を発表し、四十九年、小森江浄水場に「生誕地記念文字碑」を建てたから、余計にややこしくなった。下関は文学上の出身地で、門司は考証上の、というのが今日の定説だそうだが、本当のことは母親のみが知る。「私は古里を持たない。父は四国の伊予の人間で、太物の行商人であった。母は九州の桜島の温泉宿の娘である。母は他国者と一緒になったというので、鹿児島を追放されて父と落ちつき場所を求めたところは、山口県の下関という処であった。私が生まれたのは、その下関である。」

母キクの私生児として届けられた芙美子『放浪記』の冒頭にこう書いた。父は母より十四歳年下の宮田麻太郎で、明治三十七年に「軍人屋」を下関で開業している。質流れ品などを扱うテキ屋で、それが当たって九州各地に支店を開くまでになり、三年後、本店を若松に移した。だから、芙美子が最初に下関で過ごした期間は三歳までであろう。その後、母キクは二十歳年下の沢井喜三郎と共に芙美子連れて家出し、転々とするが、佐世保から下関に戻って来て古着屋を開いたのが明治四十四年一月のこと。

「三度目の小学校でしたが、私は下関という町で、名池小学校というところへ通学するようになりました」と彼女自身も『一人の生涯』に書いたように、小学一年生の三学期から五年生の二学期まで、名池尋常小学校に在籍している。しかし、実際に登校したのは四年生の三学期終了までで、五年生の時は無届欠席のまま鹿児島に転任したため除籍された。だから、芙美子が下関とかかわった歳月は、出生時の三年余と名池小に通った三年半足らずの、約七年弱だと考えて良い。



芙美子が通った名池小学校、学籍簿と東蓮寺の井戸



今も信仰をあつめている名池坂の水かけ地藏

「登校東蓮寺、下校法幢寺」と、同じような記述が幾つも私の古いノートにある。これは芙美子が病歿した直後、級友の重松君と二人で、赤岸から奥小路あたりを聞き歩いてメモした昭和初期の名池小への通学路だ。浄土宗東蓮寺の石段の下に「名池」と呼ばれる井戸がある。その小路から佐島外科の前の石段を喘ぎ登校。帰りは市役所へ通じる急坂をくだって法幢禅寺の境内で遊んだり、少し廻り道をして水掛け地藏に水を掛けたりする子が多かったように、恐らく芙美子もこのコースを何度も辿ったに違いない。もう一つ、そのノートには、書き写した日のことまで鮮明に憶えている箇所がある。昭和二十八年春、「林芙美子は女郎までやったんだってなあ」とつぶやいた友人に腹を立てた私が、彼女の名誉のために図書館通いして書きとめたものだ。中央線四ツ谷駅から近い赤坂離宮は、迎賓館に生まれ変わって久しいが、当時は荒れるにまかせたままで、図書館として一般に開放されていた。「こんなに苦しくっても、田舎に居た時代が今では一番なつかしくてなりません。わたしの生まれたのは、山口県の下関です」芙美子は、『思い出の記』にもこのように書いているが、「古里を持たない」とか「いづくにか吾古里はなきものか」などと叫びつつも、「生まれたのは下関……」と書き続けて、四十七歳の若さで歿した。戦後の短期間に濫作を強いられた彼女を、人々は、「ジャーナリズムによって殺された」と噂し合ったが、その底には、「単なる大衆作家」と同一視したくないという気持ちがあったのかもしれない。芙美子が一番懐かしがった下関には、前記生誕地碑のほか亀山八幡宮に文学碑もあるが、命日の供養をいまだ聞かず、対岸門司では毎年芙美子忌が催されている。

富田義弘

めったに開くことのない古いノートを、久しぶりに取り出してみる。藤本英雄、平山菊二、田中絹代、木暮実千代ら、下関にゆかりの人物記事を抜き書きしたB5判ザラ紙の綴じ込みだ。ペラペラとめくると、林芙美子についてのメモも何方所がある。「明治三十七年、下関のブリキ屋の二階に生まれた女の子は、四十七歳の生涯を、昭和二十六年六月二十八日、宏大な邸宅である東京下落合の自宅で閉じたのであった」といつ、どこで、何から写したものであったのか憶えていない。芙美子の誕生日が「明治三十

子供は毎日生れてゐる。色々な女から。女の美しい夢のなから。わたしは、わたしの母を何で侮蔑することが出来るだらうか。『一人の生涯』より

何らかの意味で、自分の人生に絶望を持たないで生きて来た人間は、一人もないにきまっている。『冬の林檎』より

林芙美子略記

- M36 (1903) 12.31 下関市田中町のブリキ屋で宮田麻太郎と林キクの間に生まれたが私生児 本名フミコ
- M37 (1904) 父麻太郎が下関市で軍人屋という店を開業
- M43 (1910) 母キクは沢井喜三郎と共にフミコを連れて家出
- M44 (1911) 1- 義父喜三郎が下関市で古着屋を開業したのでフミコは佐世保市の小学校より下関市立名池尋常小学校に転校
- T3 (1914) 古着屋倒産 フミコは鹿児島島の祖母の家に預けられる
- T5 (1915) 両親と共に転々としたのち尾道市の小学校に編入し小林正雄訓導によって文学的に開眼
- T7 (1918) 尾道市立高等女学校に入学し森要人・今井篤三郎両教諭によって更に文学的な影響を受ける
- T10 (1921) 山陽日日新聞や備後時事新聞などに秋沼陽子の筆名で詩や短歌を投稿し掲載される
- T11 (1922) 女学校卒業後上京し職を転々として、翌年秋、筆名を芙美子と決める
- T15 (1926) 長野県出身の画家生手塚縁敏 (M35 生れ) と内縁関係
- S3 (1928) 『女人芸術』に2年間「放浪記」を連載し好評を受ける
- S19 (1944) 夫縁敏と貰い子孫を林家に入籍する
- S20 (1945) 実父麻太郎が下関で死去
- S24 (1949) 『晩菊』により第3回女流文学者賞を受賞
- S26 (1951) 6.28 夜11時頃より苦しみ始め、29日午前1時心臓マヒのため永眠 「めし」(朝日新聞)、「津波」(中央公論)、「女家族」(婦人公論)、「真珠母」(主婦之友)の連載がすべて未完となる

絹の道の会発行より抜粋